

# 中学校美術科・鑑賞題材の開発への実践的アプローチ

－「鑑賞ノート」からの考察②－

長友紀子

(奈良教育大学附属中学校)

Practical Approach to development of the subject matter of Art Appreciation Learning  
－ A study of [Appreciation Note] II －

Noriko NAGATOMO

(Nara University of Education Junior High School)

**要旨：**現在、「10分鑑賞」と名付けた鑑賞学習を1年生で行っている。「10分鑑賞」は、授業のはじまりの10分間で、作品を鑑賞し感じたことを「鑑賞ノート」に記録する学習活動で、鑑賞学習の時間の確保の難しさという問題を解消することと、繰り返し鑑賞を行うことで、創造的および批判的な作品解釈の技能を育てることの2つを大きな目的としている。これまでに7作品の鑑賞を終えている中から、本報告では、作品 N0.2 の鑑賞と、「10分鑑賞」を50分に拡大し、作家の制作の跡をなぞる活動を加えた作品 N0.6 の鑑賞について触れ、鑑賞題材の開発の可能性について考察する。

**キーワード：**鑑賞題材の開発 development of the subject matter of Art Appreciation Learning  
実践的アプローチ Practical Approach  
制作と鑑賞 Creation and Appreciation

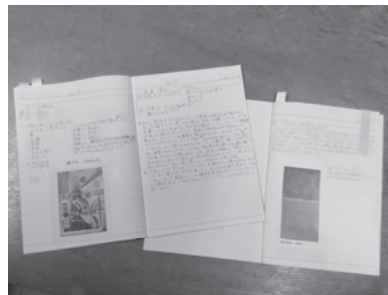
## 1. はじめに

美術教育の中で、鑑賞領域に関する学習は、子どもたちがそれぞれの価値観を育んだり、作品から創造的に意味を見出したりするための重要な学びであり、学習指導要領においても、内容の充実や授業時数の十分な確保が促されている。しかし、その重要性は認識されながらも、時間数の確保や題材選定など、クリアすべき問題が多く、作品制作といった表現領域の実践と比較して、まだまだ実践が十分に行われているとは言えない状況である。

筆者は、鑑賞領域の授業題材の開発を一つの研究目標として設定しており、昨年度は ICT 機器を活用した協働的鑑賞学習の題材を実践している。昨年度の実践を通じて感じたことは、美術作品に触れる鑑賞をもう少し日常的に経験させて、その経験で得た学びを毎回の制作に生かすような仕組み作りはできないだろうか、ということだった。そのために、活用できないかと考えたのが、2014年度から行っていた「鑑賞ノート」である。

「鑑賞ノート」は、鑑賞の記録を取るために1人1冊配布した大学ノートのことで、鑑賞の記録を読み返すことで、生徒が自分自身の価値観の変化や作品に対する言語表現の変化を振り返ることができるようにと考えて、実験的に始めた試みである。実施回数や実施時期などは定まっておらず、2014年度1年間で鑑賞できた作品は5作品にとどまった。

表 1 鑑賞ノート



2015年度は、この鑑賞ノートを使う場面をより多く設定し、できるだけたくさん作品に触れることを目指した。そのため、「10分鑑賞」と名付けて、授業の最初の10分間で鑑賞を行い、その後の時間は通常の制作を行うという授業の形を作って実践している。

本報告では、その「10分鑑賞」の中から、作品 No. 2 と、作品 No.6 について報告する。なお、「10分鑑賞」の実践については、奈良教育大学附属中学校研究紀要第44集でも述べている。参照していただくと幸いです。

## 2. 実践について

### 2. 1. 「10分鑑賞」の実践方法

最初に、「10分鑑賞」の実践方法を簡単に説明する。用意するものは、生徒1人に1台のタブレット PC であ

る。生徒はタブレット PC に設定されたフォルダーに入っている作品を表示する。作品写真は拡大して見ることが可能である。次に教師は、生徒にクエスチョンを提示する。このクエスチョンは、自分自身や対象・主題・文脈等から作品へアプローチができるようにしている。クエスチョンは、『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』を参考に、作品に合わせて考えている。

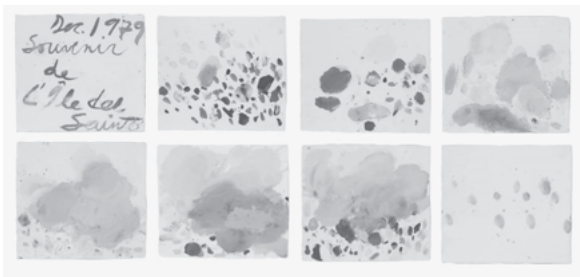
生徒は、教師から提示されたクエスチョンに答える形で作品を鑑賞し、自分の考えを鑑賞ノートに記述する。記述時間は 10 分間である。鑑賞時間が終わると、ノートは回収され、次の授業の始めに生徒の記述の発表が行われる。これは、生徒自身が読む場合もあるし、教師が読む場合もある。

## 2. 2. 作品 No.2 「Souvenir de L'île des Saintes」

作品 No.2 は Cy Twombly の 8 枚連作の水彩画である(表 2)。

クエスチョンは「この絵が話している物語はなんですか」とした。8 枚の画面があるので、ページが変わっていく絵本のようにとらえて記述するように促した。

表 2 「Souvenir de L'île des Saintes」



鑑賞ノートの記述より

### 生徒 1

(右上から左に向けて進み、文字のある絵は飛ばして左下へ、右に進んで右下が最後)

1. 5 歳の少女がお父さんに買ってもらった水彩絵の具で画用紙に色をぬりました。一気に使ってしまうともったいないので、できるだけ水でうすめて色をぬりました。
2. その日の夜、少女がぬった色たちは外の世界を見てみたいと思い、脱走することを決めました。まず、色たちは自分たちのもとの色に戻りました。
3. そして色たちは気づかれぬように、小さいバラバラのかたまりになって、少女の部屋の窓から脱出しました。
4. しかし、窓の外は雨が降っていたので、色たちは水でうすめられた前の姿に戻ってしまいました。
5. 外の世界は想像以上に厳しく、色たちはボロボロになってしまいました。やがて、仲間の色の 1 人が打ち付けてくる雨に耐えきれず、地面に落ちてしまいました。
6. そして 20 色以上の仲間が地面に落ちてしまいました。

7. そして、残った色たちは雨になりました。雨になった色たちは、しかたなく元通りに画用紙の上に帰りました。

### 生徒 2

(順番不明)

1. ある山に色のついた、大きい湖がありました。
- 2～3. その湖は、不思議なことに毎日色が変わります。そして、色の濃さも変わります。そうです。これは絵の具の湖なのです。まるで、湖の気持ちをあらわしているかのように、晴れていて気持ちのいい日は元気で明るい色、湖が汚れていると暗い、にごった色になります。
4. その絵の具の湖には、さまざまな色の生き物がすんでいます。ちょうどこの時期は赤い生き物が多い時期です。
5. 大きな魚になればなるほど、色が薄くなっていきます。もしかすると、1 匹にあたえられる絵の具の量は決まっています、うすく伸ばさないと全体に色がつけられないのかもしれない。
6. 魚がいろいろな色の仲間を集めて練習していました。
7. 魚たちは、チームで絵をつくる大会に出るそうです。

### 生徒 3

(最初が右下の 2 枚、次が左下の 2 枚、次に上の段の 1 番右、次に上の段の真ん中 2 枚、最後に左上)

1. 山登りが好きな人がいました。ある日、その人は、ある山にのぼりました。(一番右が足あと、上が山)
2. 登っていると、雨が降りそうな雲があって、それが大きくなっていきました。
3. 雨はいやだなと思って雲を見ていると、その雲からいろいろな色の雨が降っていました。
4. そして、しだいに雨の色が山に移り、赤や青の山ができていました。
5. そして山登りをしていた人は、山にひとめぼれし、芸術の職につき、1927 年にその山の絵をかって本を出したのです。

生徒 1～3 の記述を読むと、共通しているのは「この絵が話している物語はなんですか」というクエスチョンを素直に受け止め、絵を観察することで発見した形や色の変化を自分なりに構成しなおし、お話を作っているということである。作品 No.2 は色合いが美しく、タブレット PC の画面で見ても明るく映る。画用紙の上にあられた、水彩絵の具独特のにじみによる形の面白さや、色同士が混ざり合って、何色ともつかない色になっているところなどが、生徒の想像力を刺激しているようにみられる記述が多かった。

生徒 1 は、少女が画用紙に塗った色たちが、夜中にこっそり家を抜け出す、という冒険のようなお話を考えた。画用紙に薄く塗られた色たちが、本来の色に戻り、部屋

の窓から外へと出ていく様子の記述などは、作品 No.2 を見ながら読むと、Cy Twombly の描いた色のリズムなどとあいまって、非常に魅力的である。せっかく冒険に出た色たちだが、雨に打たれて薄くなってしまったり地面に落ちてしまったり、ボロボロになってしかたなくまた元の画用紙に戻る、という最後の終わり方までよく考えられている。

作品 2 は、特に色に関心が寄せられていることがわかる。場面を絵の具でできた湖、として、その中に住む生き物たちの様子をお話している。晴れていて気持ちのいい日は元気で明るい色、湖が汚れていると暗い、にごった色というように、感情を色に置き換えて表現したり、1 匹に与えられる色の量が決まっている、と考えたりしているところは、実際に水彩絵の具を使ったことがあるからこそその発想のように思う。

生徒 3 は、下から順番に画面を見てお話を作っていた。最後の文字の描かれた画面をお話のおちに使うところなどは、他の生徒にはない発想である。山登りをしていた人が、色とりどりの山に魅了されて描いた絵がこの作品、ということだろうか。右上の画面にあらわれた形を山ととらえるなど、絵の中に見つけた形を何か別の物に見立てて鑑賞している様子がわかる。

この作品では、記述の発表は教師がノートを読む形で行った。美術教室前方の電子黒板に作品画像を写し、順序を手で示しながら、読み聞かせをするように発表した。生徒 1～3 の記述のように、絵本のお話のように書いている生徒が多く、教師が読み上げるお話を聞いている生徒の様子は、幼い子どもが読み聞かせをしてもらっているようで、電子黒板の絵を見ながら熱心に聴いていた。生徒は、他の生徒が作品をどのように解釈したかを知ること、自分にはなかった作品の見方や、作品について考える楽しさを知ったのではないだろうか。

### 2. 3. 作品 No.6 「Salta nel mio Sacco」

作品 No.6 は、Frank Stella の半立体的な絵画作品である。この作品は、実際の大きさが 3735 x 3250 x 390 mm という巨大なもので、素材はアルミニウムとキャンバス、油絵でできている。

作品 No.6 の鑑賞には、50 分の授業 1 時間をあてた。ここでは、クエスチョンを提示するのではなく、実際に作品 No.6 と同じような半立体的な絵画作品を作ってみることで、作品について考えるように場面作りをした。

立体的な作品は、10 分鑑賞のように画像で作品を鑑賞する形式においては、やや扱いにくさを感じるものである。立体ならではの空間性や、質感、量感といったものが、画像からは伝わってこないからである。しかし、鑑賞の対象を平面だけにとどめてしまうことはできない。そこで、実際の作品の形を模倣する疑似制作を織り交ぜて鑑賞を行うことにした。

表 3 「Salta nel mio Sacco」



授業の流れは次のように設定した。最初に、タブレット PC で作品鑑賞をする時間を 5 分とり、生徒は画像を拡大したりして、細部まで観察を行う。作品について気づいたことを全体で共有し、ここで、教師から作品 No.6 が半立体の作品であることが知らされる。半立体の作品を模倣して制作を行うこと、材料は段ボールと色画用紙、ボスカを使用すること、段ボールの厚みで平面に立体感を出すことを説明する。制作は 40 分間で、できた生徒から教室前面に置かれたパーテーションボードに作品を貼っていく。最後に作品 No.6 を改めて鑑賞する。

作品 1



作品 2



作品制作は、活発な会話の中で行われた。画用紙の色は15色程度を人数に対してかなり多く用意した。画用紙の色鮮やかさが制作の刺激となったところもあったし、ポスカという気軽に使える着色材料も、生徒にとっては良かったようだ。

作品 No.6 には、5～6層の平面の重なりがあったので、生徒には少なくとも3層以上は重ねて立体感を出すように指示をしたが、3層を超えて、どんどん制作を進める生徒が多かった。Stella の作品の疑似制作であるので、作品の画像を電子黒板に表示しておき、具体的な形が見受けられないことや、カラフルな色使いなどを補足していった。最初の5分間の作品鑑賞と、作品に対する気づき（作品の中にどのような形があるか、それらの形は抽象的であること、どんな色が使われているか、など）を全体で共有していたこともあって、ハートや星、お花などのよく出てくる具象的な形を作る生徒はなく、40分間の授業中、制作が止まってしまう生徒もいなかった。

それぞれの平面の層を、好きな形に切り取り着色した色画用紙で作り、段ボールを2重、3重に重ねて好みの厚みをつくり、さらに平面の層を重ねていくという行程の中で、作品全体の形が思いもよらないものになっていくことを楽しみながら制作している様子であった。

仕上がった作品をパーテーションボードに貼りつける際、作品の向きを確認すると、「この向き！」と決めている生徒もいれば、あらためてボードに貼ってみて「やっぱりこっち向きにする」と作品がより良いと思う向きに変える生徒もいた。学級の友だちの作品がすべて貼られると、「すごい!」「あの右上のやつめっちゃいい」などと、隣同士や前後の席で話をしながら楽しそうに鑑賞を行っていた。

最後に、タブレット PC で改めて作品 No.6 を鑑賞した。作品の大きさを知らせると（ほぼ黒板と同じ幅、高さは天井を突き抜ける）、その大きさに驚き、どうやって作ったのか、という疑問を述べる生徒もいた。

作品 No.6 の場合、単に画像を見るだけの鑑賞ではなく、自分で平面を半立体に制作していく過程を経験したことと、自分の手で作ってみて、実際の作品の大きさとその差が実感できたことは、作品の魅力や面白さを感じるために役立ったという手ごたえがあった。

次に、作品 No.6 についての自由記述を紹介する。これは、「10分鑑賞」で鑑賞した作品の中から1作品選んで、その作品について自由に語る、というもので、生徒の作品解釈の力がどのように伸びていくかを今後判断する材料とするために行った。実施したのは、No.6 までの鑑賞を終えた段階で、記述の時間は通常と同じ10分で行った。

生徒4

初めて見たときは色もあまり華やかではないし、色の組

み合わせも、いまいちだと思った。私が今まできれいだと思った作品は、抽象絵画だったとしても、色が華やかだったり、暗い色でも色の組み合わせ方が同じようなトーンのもので統一されているようなものだったが、この作品はその逆だったので、なんだか心に残った。この作品は形がおもしろいという気持ちは初めて見た時も、今も変わっていない。ずっと見ていると四角い長方形に見えていたものの先っぽがまるく見えてきたり、クリスマスツリーのような形に見えていたものが平面の形が重なっているように見えたりする。そして、そうやっているうちに色も、これはこれで楽しいなと思ったりしてくる。色を塗っている上に違う色の線で描いたりしている所も一つの魅力だと思った。

生徒5

私がこの作品を選んだ理由は、私が思っていたよりもこの作品は大きかったから、ということと、下の作品にうつる上の作品の「カゲ」が良い、と思ったからです。それに、「おうぎ」みたいなものや、「カナヅチ」みたいなもの、一つ一つが、これってあの型・・・?と思います。よく見ると違っていたり、パッと見たときと、じーっと見たとき、いろんな見方をしたとき、全部ちがったように感じる事が出来る、というのが素晴らしいと思いました。色合いも不思議だし、全部自分で塗っているのかと思えば、まっすぐな線もあつたり、とても不思議です。でもどこか知っているような、見たことのあるような雰囲気も持っているの、私はこの作品にしました。それに、この作品は、一つの『法則』のようなものがあるようで、まっすぐの直線のところでは、同じ色をそのまま塗っているだけ、と決まっているけれど、自分で描いたり、切ったりしているところでは自分で塗ると決まっています。そんな、法則のようなものがあるというのも、良いと思いました。

生徒6

僕は、No.6 の作品で、作品の構造に注目してみました。この作品は、絵などの平面的な作品ではなく、一つ一つを浮き上がらせた立体的な作品です。そこから、作者は今の自分の気持ちを平面的な作品ではなく、立体的な作品とすることで、より、自分の気持ちに近づけたかったのだと思います。作品の構造に注目してみると、赤色や黄色などの明るい色を内側に、灰色や黒色、群青色などの暗い色を外側につけていることから、作者は、楽しくゆかいな気持ちを内側、言葉に表せない、悲しくつらい気持ちを外側に構造として残したのだと思います。

生徒4、5は、パッと見たときと、じーっと見たときで見え方が違うということや、見つめていると違う形が見えてくることなどを理由に、作品の形の面白さを語っている。生徒6は、立体にしたことで作者の思いがより

伝わっていると考え、作品の構造を自分なりに解釈した。

生徒すべてに共通しているのは、作品の魅力を生体的な部分に見出しているということである。これは、画像でみるだけではなかなか感じにくい部分だろう。実際に半立体の作品を作ってみて、改めて同じ構造の作品を鑑賞したことで、作品の持つ平面どうしの重なりから生まれる影の魅力や、ひとつの平面だけでは表れない重層的な形の変化などに気づいていった様子を読み取ることができる。

### 3. 成果と課題

#### 3. 1. 10分という時間

現在のところ、7作品までの鑑賞を終えていて、今後年度内に3作品、合計で10作品の鑑賞を行う予定である。本報告で取り上げた作品No.2とNo.6の生徒の記述から現段階での成果と課題を述べる。

まず、10分間という時間設定についてである。「鑑賞ノート」の記述の分量を見ると、作品によってばらつきは見られるものの、平均するとノート半分程度の記述量になると言っていと思う。中には言語活動が苦手な生徒もいるので、5分では書き始められない生徒が出てくるだろうし、15分では早い生徒が時間を持て余してしまう。また、50分の授業のうち15分を鑑賞に使ってしまうと、残りの制作時間の確保が難しくなる。一概には言えないが、10分という時間は作品を鑑賞しながら記述をするのには適切な時間といえるのではないだろうか。

#### 3. 2. 題材とクエスチョンの選択

次に題材であるが、取り上げた作品の一覧は次のようになっている。

- No.1 Mark Rothko 「Untitled」
- No.2 Cy Twombly 「Souvenir de L'Ile des Saintes」
- No.3 Klee Paul 「Flora on Sand」
- No.4 Wassily Kandinsky 「Swinging」
- No.5 元永定正 「いろいろ」
- No.6 Frank Stella 「Salta nel mio Sacco」
- No.7 Cy Twombly 「Untitled」

平面作品がほとんどで、No.6のFrank Stellaのみが平面ではあるが、半立体作品となっている。タブレットPCを使用した鑑賞ということで、完全な立体作品を選ぶことができなかったのが、今後の課題である。

7作品すべての鑑賞が終了した後、作品No.2で鑑賞ノートの記述を紹介した、生徒1と生徒2にインタビューを行った。ここで生徒に聞いたかったのは、クエ

スチョンの有無が鑑賞にどのように影響しているか、ということである。

まず、授業では「この絵が話している物語はなんですか」というクエスチョンがあったが、今自由に作品について語るとしたら何を言いたいのか、とい質問に対して、生徒1「いろいろな色で描かれているので、作者がどんな気持ちだったのかな?と思う」生徒2「点の集まりともややもしたものが花畑みたい」と答えた。クエスチョンがあった方がいいか?という質問に対しては、生徒1「あった方が、個人の考え方の違いがわかって面白い」、生徒2「あった方がいい。全体でなんとなく、というのではなくて、部分部分で見えていくことができるから」という答えだった。

10分鑑賞のクエスチョンで利用している「美術館活用術～鑑賞教育の手引き」は、ロンドン・テートギャラリーの教育普及プログラムを紹介するもので、イギリスの学校教育を前提としたものであるが、今の日本の美術教育の現場にも十分活用できるものと考えている。クエスチョンは、生徒の鑑賞を深めるために有効であると考えてよいと思う。

今後は、テート以外の美術館の鑑賞プログラムや、アジアを含めた各国の美術教育について調べながら、授業内容を改善していこうと思う。また、制作を交えた鑑賞についても、実践を重ねる中で有効な手立てを構築していくことを今後の課題としたい。

### 参考文献

- 宇田秀士「教師教育における鑑賞教材開発(1)ー美術教育実践の現状と課題からー」教育実践総合センター研究紀要(11), 9-17, 2002-03
- 奥村高明・長田謙一監訳 ロンドン・テートギャラリー編「美術館活用術ー鑑賞教育の手引きー The art gallery handbook」美術出版社 2006
- 金子一夫「美術科教育の方法論と歴史(新訂増補)」中央公論美術出版 2012
- 長友紀子・狩野宏明・宇田秀士・竹内晋平「ICT機器が可能にする協働的鑑賞学習の試みー中学校美術科の@美術館の展示をつくる」の実践を通して」奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要第1号 2015-03
- 長友紀子「解釈の技能を育てる場としての『鑑賞ノート』」奈良教育大学附属中学校研究紀要第44集 2015-10